

石川七五三二教授(1897~1973)のこと

見 玉 省

元山梨大学教授本学会名誉会員石川七五三二氏は、本年2月6日長逝された。昨年11月甲南大学の応心大会でお目にかかり、大学の委員招宴で隣りに坐っていた時の事が真に昨日のようである。筆者は石川さんにとくに親近感を持っていた。年齢が筆者が一つ上のほぼ同年令。その児童興味検査と知能検査に対する興味が似通っていたことなどからであろう。あの興味検査はシュブランガーの理論に基づいた独創的な研究であった。

十年前に山梨大を退官して繁忙から解放されて、「60才を目標にして」積み重ねてきた研究を「平均寿命10年延長」と「人生再出発」で完成しようと言っていたことが出来なかったことが彼のために惜まれてならない。在満州6年間に蒐集した在満民族についての実験資料などが埋もれることになったことが残念である。

石川さんは明治30年秋田の生れ。東京高師から東京文理大を昭和15年卒業。あちこちの中等学校で教べんをとって後、愛知県立児童研究所長、続いて名古屋研究所長、それから満州教育研究所、女子美大教授。昭和25年以来13年間山梨大学教授心理学教室主任。38年退官後は山梨英和短大教授であった。

個性の強い人では、附属小学校長の時、筋が通らないと父兄に負担をかける宴会には絶対に出なかったという話がある。応用心理学会を愛し、昭和31年山梨大で応心大会を開催した。何も長生きをしたいというのではない。ほう大な研究資料の後仕末をする学的責任を負うと書いていた君の風ぼうが忍ばれる。しかし彼の言葉によると、「美しい自然、温かい人情」に包まれた土地を終焉の地としたことは満足であったろう。

学会の皆さんと一緒にごめい福を祈る次第である。